

最後の食事

加藤 節子

もう30年も前のことだ。父はがんに侵され、自宅療養をしていた。医師の往診もなければ、看護師による訪問看護もない時代だ。毎日、寝室の壁に向かって寝ているだけである。時々見舞いに行く私を見ると、小さくうなずく言葉はない。ほとんど食べ物が喉をこさない状態だった。

ある日、よほど気分が良かったのか、父が力を振り絞って

「おいしいものが食べたいなあ」と、言った。

「何が食べたいん？」と聞く私に、

「おいしいものがええなあ」と言う。

ただそれだけで、あとの言葉はない。私は、父の欲しいものが分からなかった。

あの時、父は何が食べたかったのだろうか。父に何を食べさせてあげたらよかったのだろうか。何もしてあげられなかったその時のことを思い出すと、つらくなる。

そして、今春、私は心臓手術を受けた。7時間もかかると言われた手術、心のどこかで大げさだが、(万が一、死ぬこともあるのかな……)と考えていた。

「元気になったら、おいしいものが食べたいわ」

「おいしいものって？ 抽象的でよく分からんな。君がつくる家の食事が一番おいしいよ」

「それじゃあ、少しも楽しくないわ。私が元気になったら、何を食べさせてくれるか、どこで(ち)そうしてくれるか、ちゃんと考えて

おいてよ」

入院する前、夫とのやり取りは食べることについて話すことが多かった。

人は死ぬかもしれないと感じた時、もしかしたらおいしいものを食べておきたいと考えるのだろうか？ 遠い昔、父は死の床でもおいしいものが食べたいと願った。そして、私も今回手術をすることが決まって、おいしいものが食べたいと欲した。どうも食欲は貪欲らしい。

入院して4日目、手術前日の夕食は井いっぱいの白飯とおかずが数品。味付けは薄く、お世辞にもおいしいとは言えなかった。特に、ご飯がぱさぱさだ。そうだ。私は、ご飯が好きだ。甘くて、粘りがあってふつくらとしたご飯が食べたいと切に思う。

最後に食べたいものと聞かれたら、「米のランク一位のお米で炊いたおにぎりが食べたい。梅干しを入れて、味付けのりが巻いてあったら最高」。

あの時、なぜ父におにぎりを握らなかったのか。病院の床で私は涙した。

作者 加藤節子

題名 最後の食事

原典 山陽新聞夕刊エッセー

原典の掲載日 2018.11